

女と男が ともに生きる未来へ



Vol 8

CONTENTS

今が変わり目 男性たち
・地域の中に居場所をつくる
・失われつつある高校生の「生活」能力 1

せんなん男女共同参画ルーム
“ステップ”にご招待 3

大阪府立女性総合センター
(ドーンセンター)
竹中恵美子館長に聞く 5

日本女性会議に参加して 6

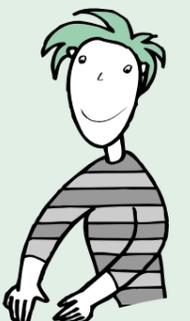
ジェンダーワード
INFORMATION 7

泉南市





今が変わり目 男性たち



少子・高齢社会を乗り切るためには、男女がともに力を出しあって仕事と家庭を担っていく必要があります。長い間続いてきた「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業が男性の側からも見直されてきています。その先陣をきるのが定年後の男性。一方、若い男性はどうでしょう。今が変わり目の男性たちにスポットを当ててみました。

地域の中に居場所をつくる —「男のクッキング」グループを訪ねて—

10月の秋晴れの土曜日、樽井公民館まつりの会場には「水ナスカレー」のよい匂いが立ち込めていました。調理し、模擬店で販売していたのは公民館クラブ「男のクッキング」の方々です。

このグループは、平成7年度から3年間、公民館の主催で行なわれていた、「男のクッキング講座」終了後、受講生が自主的につくったグループで、今年で6年目。現在のメンバーは12名、年齢は47歳から76歳までの幅広い世代の男性たちです。

参加のきっかけは、市の広報を見て自分から進んで応募した、妻に勧められたなどさまざまですが、退職後、地域の中に自分の居場所のないことに気づき、仲間づくりのきっかけとして、参加を考えたことは共通しているようです。

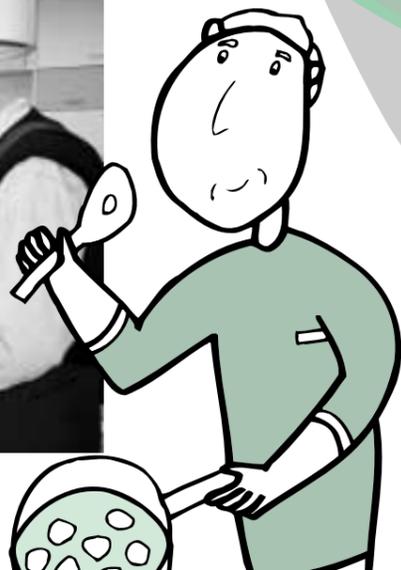
長い間、職場という縦社会の人間関係の中において、地域の人とつながりのなかった男性たちにとって、初めて参加するのは、「少し勇気がいりました」とのこと。しかし、おそろおそろ入ってみると、みんな和気あいあい。年齢の分けへだてもなく、以前の職業を誇ることもなく、初心者には親切に教え合う雰囲気だったそうです。「自分のカラを破ったら、こんなに楽しいことはありません」と口を揃えて話されます。

そのグループ活動を支えているのが、公民館講座以来の講師、柳楽洋子さん（新家在住）。「男の料理という、材料を豊富に使った豪快な料理という印象がありますが、ここのクラブでは身近にある材料を使って、後片付けまでが料理ですよと教えています。それをしてこそ妻の苦勞がわかり、よき理解者になれると思うのです」とおっしゃいます。たまたま、模擬店に来られたメンバーのお連れ合いが、「夫の作るカレーやポテトサラダは最高。私は35年間料理を作り続けてきたのですが、今は家族が集まると夫が腕をふるってくれます」と、柳楽さんの教えが浸透していることを証明して下さいました。

「自分が一人暮らしになった時のために」「家族を喜ばせたい」など今後の目標はさまざまですが、「生活自立」に向け、今、男性たちも変わりはじめているのは確かです。



樽井公民館まつりで水ナスカレーを作る「男のクッキング」の方々



失われつつある高校生の「生活」能力 —ジェンダー意識は変わったけれど—

府立少路高校教員 南野忠晴



僕が、13年間教えてきた英語に見切りをつけ(?)、始まったばかりの男女共修の家庭科を教えるようになって、早いもので今年でちょうど10年になる。高校の教室で、「男女が机を並べて」家庭科の授業を受けるようになってからのこの10年、僕が見てきた高校生たちの何が変わったのか。ジェンダーと生活の視点から、最も特徴的だと思える変化を述べてみたい。

■家庭科の男女共修がもたらしたジェンダー意識の変化

家庭科の男女共修に関しては、今でも、共修を経験していない年齢層（つまり、20歳台後半以上）のひとたちから、「今は、男女で一緒に家庭科をしてるんですね?」と尋ねられることがある。「男の子もまじめに授業を受けます?」ときかれることもあるが、生徒たちにとっては、質問自体がすでに意味不明のものになっていると言ってもいいかもしれない。彼らにとって家庭科は、国語や算数と同じく、小学校からずっと男女で一緒に勉強してきた科目のひとつなのだ。当然だろう。10年という時の積み重ねは、確実にひとの意識を変えている。たとえば、10年前には次のようなエピソードがあった。

それは、僕にとっても初めての調理実習だったからよく覚えているのだけれど、ある班に、イスに座ったままでなかなか実習に取り掛かろうとしない男子がいた。同じ班の女子が、「先生、〇〇君、ぜんぜんやろうとしないんです!」と訴えてきたので、「ほんど?」と声をかけると、当の男子が冗談交じりに、「先生、料理はやっぱり女やで。女が作った方が絶対おいしいって」と言う。僕は彼の目を見てにっこり笑いながら、「そう?」と、ちょっといたずらっぽくきき返してやった。すると彼は、「自分を担当している家庭科の先生が男である」ということに突然気づいた様子で、「えっ、あっ、そんなことないですよ。やります。やります」といって、急にテキパキと働き出したのだ。最近では、こういう類のことはまったく起こらない。家庭科で扱うどの領域でも、参加意識に個人差は見られても男女差は見られない。家庭科は「生活」を扱う科目だが、生活を自分の問題として捉えるという意味では、高校生のジェンダー意識は、男女平等の方へと確実に変化している。

■失われつつある「生活」能力

しかし、僕はこの状況を全然喜んでいない。むしろ危機感すら抱いている。それは、授業、特に調理実習などをしていて、この10年間で、彼らから生活感というか、生活臭が確実になくなってきたと感じるからだ。包丁を持ったことがない、おつかいに行ったことがない、洗濯をしたことがない、掃除・風呂洗い・ごみ出し…どれもやったことがない。要するに、家事や家庭内の雑事に、一切触れることなく、家の中で、まるで「お客さん」みたいな生活をしている生徒が、10年間で目に見えて増えているからだ。

僕は、ジェンダー的に平等な社会を実現するためには、ひとりひとりの「自立」が欠かせないと考えている。でも、その自立の基礎となる「生活」能力が彼らから消え去ろうとしているのだ。高校という現場にいて、このことが、今、何よりも大きな問題だと、僕は考えている。

【南野先生プロフィール】

英語教員として勤務の傍ら、家庭科の教員免許を取得。約20名の仲間と「家庭科教員をめざす男の会」を結成。その後、大阪府の教員採用試験を再受験。94年度より現在の高校で家庭科を担当。現在大阪府立の男性家庭科教員は3名。



せんなん男女共同参画ルーム…ステップにご招待

●“ステップ”は、男女共同参画社会の実現に向けた市民活動を支援し、情報交換や交流、学習、女性のための相談ができる施設です。

学習スペースでは

- 登録したグループが学習や活動スペースとして利用できます。

交流スペースでは

- 作業・活動スペースとして、個人でもグループでも利用できます。



情報コーナーでは

- 男女共同参画に関する図書・雑誌・ビデオテープを見たり、借りることができます。
- 国・府・市町村などが発行する資料や情報誌・啓発冊子を見ることができます。
- フォーラム・講座等のチラシなどを見ることができます。

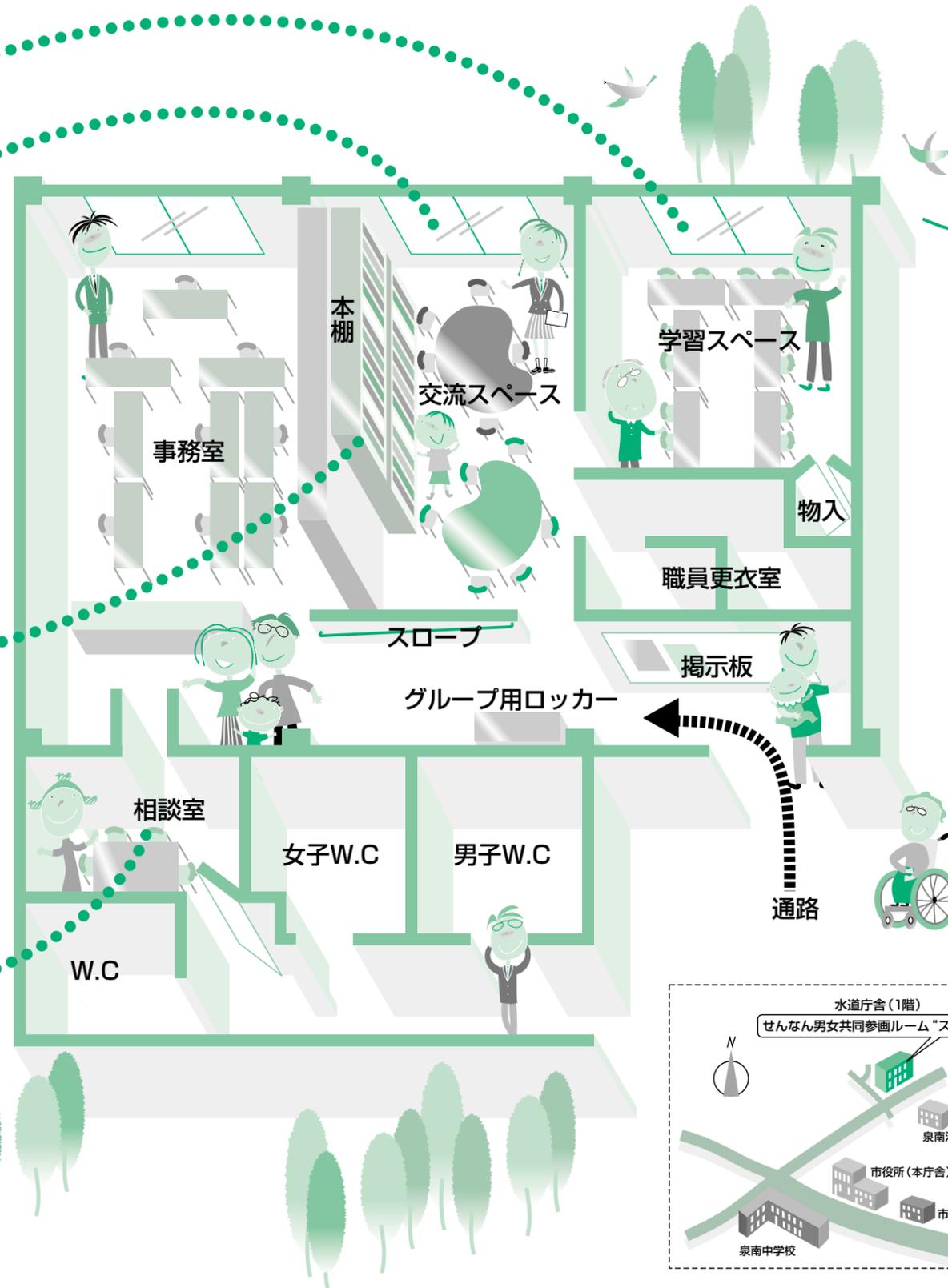


女性相談

- 女性が抱えるさまざまな悩みについて専門のカウンセラーがお聞きし、あなたらしく生きるお手伝いをします。秘密は厳守します。(P7参照)



- 男女共同参画社会とは、男女が、互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、性別にかかわらず、個性と能力を十分に発揮することができる社会のことです。



みんなで育てよう

「せんなん男女共同参画ルーム」

ステップ

日ごろステップを利用している子ども連れのお母さんにインタビュー。

今までは講座が終わったらすぐに帰ってしまっていたけれど、ルームができてからは、お昼ごはんを食べながらいろいろな方と話し合う時間をとるようになりました。

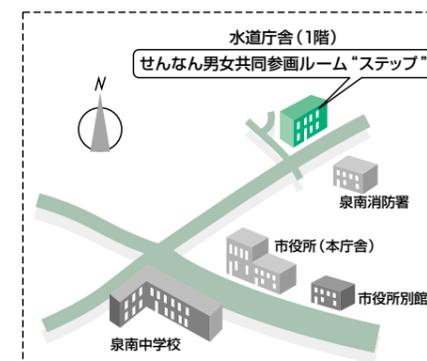
最初は「男女共同参画ルームって何？」っていう感じだったのが、子ども連れでも使えると聞いて安心しました。子育ての情報交換もできてうれしい。

泉南市には今までこんな施設がなかったので、みんなまだ使い方がよくわからないけれど、私は、学習グループの打ち合わせなんかも使っています。市民も使いやすい施設にするために知恵を出すことが必要ね。

講座の保育スペースにはおもちゃがあるのだけれど、ここにもあるといいですね。

男性の職員もおられるので、授乳する時に立がほしいですね。

せっかくルームができたのだから、もっといろんなグループの横のつながりをつくりたいですね。



利用時間 ●午前9時～午後5時(市役所執務日に限ります)
 交通 ●JR阪和線「和泉砂川」駅下車 ●南海本線「樽井」駅下車 [いずれも徒歩15分] (コミュニティバスあり)
 所在地 ●〒590-0521 泉南市樽井737番地 泉南市水道庁舎1階
 TEL 0724-83-0001 (内線270) / 直通 0724-80-2855 / FAX 0724-82-0075

大阪府立女性総合センター (ドーンセンター)

竹中恵美子館長に聞く



せんなん男女共同参画ルーム “ステップ”へのメッセージ



2003年5月に誕生したせんなん男女共同参画ルーム“ステップ”が、市民の方から「できてよかった」と言われる施設になっていくためには何が大切か、何をめざすべきかということについて、ドーンセンターの竹中恵美子館長にお話をうかがいました。

○ “ステップ” ができた意義は大きい

今、女性センターや男女共同参画センターが果たすべき役割は、男女共同参画社会づくりのための活動の拠点となることです。また、ドーンセンターを利用したくても、小さい子どもがいるのでなかなか足を運べないという方もいらっしゃるでしょう。そういった方のためにも、地域に“ステップ”のような施設ができる意義は大きいです。

新しくできた施設に魂が入っていくかどうかは、どういう人がどういう理念に立って運営していこうとしているのかにかかっています。こういった施設のいのちは、そこに関わる「人」です。行政だけでなく、施設を利用される市民の方たちも、その運営に参画していく仕組みをつくっていくことも大切です。

○ まず、利用者のニーズをつかむこと

これから何をすればいいのかということですが、まず、実際に利用される方の声を聞いて、どういうニーズが高いのかということを知ることが必要です。あらゆることを一度にやろうとしても無理ですが、一つずつでも達成感が得られれば、それが必ず次につながっていきます。また、こうした施設の運営に実際に携わっている方たちが、仕事を進めていく上での情報交換やノウハウを得るために連携していくためのお手伝いをドーンセンターがさせていただいていますが、そうしたところに職員の方が参加していけることも大切です。

○ “ステップ” から生まれる市民のネットワークに期待したい

やりたいことがあるけれど子どもがいるので……という方たちが、子ども連れでも気がねなく利用できる、そういう場所であることも必要です。また、時間があるので何かしたいという方や、人の役に立ちたいけれど関わり方がわからないという年配の方もいらっしゃるでしょう。“ステップ” がそういったさまざまな方たちをつなげる出会いの場となり、共感した人たちの間でネットワークができ、何かしようというアイデアが出てくれば、それを育てていくことができると思います。いろいろな世代の方が、自分が一番やりたいと思っていたことを大事にして、それを何か具体的な形にしていく、そのきっかけを“ステップ” がつくっていくのではないのでしょうか。

「日本女性会議2003おおつ」 に参加して



「日本女性会議」は、1984年に女性問題の解決に向け、名古屋市で開催されたのが最初で、それ以来、市民と行政とのパートナーシップのもとに、毎年全国規模で実施されています。今年は、20回目という節目の大会であり、「いのちの世紀 びわ湖で輝け 女と男」というテーマのもと滋賀県大津市で開催されました。泉南市では、男女共同参画社会の実現に向けて活動されている市民グループの方々に参加を呼びかけ、2名の方が参加されました。記念講演と分科会について、参加された方々からの報告をご紹介します。

 記念講演、「平和と命の大切さ」をテーマにした瀬戸内寂聴さんのお話を聞きました。

「日本女性会議は満20周年を迎え誠に嬉しいことであり女性の地位が向上していることをうれしく思う。」と語られ、「人間は自分の事をするだけでなく、存在が誰かを幸せにすることが大切だ。」また、米国の同時多発テロ事件にもふれられ、「大切なのは命であり、平和である。恨みに対して恨みで返すという考えはいけない。やられたらやり返すという気持ちではいつまでも平和にならない。」と強調されました。

日本でも痛ましい事件が次々と起こっています。人々が手をつなぎ、明るい平和な社会をめざして、まずは地域で活動し、友好を深めていこうと改めて思いました。(H.Y)

 「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ(性と生殖に関する健康と権利)『自分のからだの声を聞こう』」の分科会に参加しました。

女性は生涯にわたって、自分のからだの健康の保持、増進や自己決定を図ることが大切で、そのことについて医師、ジャーナリスト、子宮筋腫体験者自助グループのメンバー、大学教授の事例発表がありました。その1つに、富士見産婦人科病院事件があり、その被害者が立ち上がったことをきっかけに、さまざまな問題が明るみに出たのです。医師の言いなりに子宮を摘出した人が1000人もいたという事実、自分のからだについての知識が乏しく、反論できる人も少なかったことがあの大事件に至ったのです。この話から子宮をとるか、とらないかの自己決定のあり方や、医療とどう付き合うかについて、また、からだは人権の基盤であることを学びました。

セカンドオピニオンが不可欠の時代。これは無知ではいけない、やはりエンパワーメントして女性の問題として捉えていくことの大切さを知りました。その他参加者からの質問があり、女性専用外来、ピル、若者の身体の意識、性教育、不妊治療、乳がん、総合外来など女性のからだのことが熱い思いで話しあわれました。(K.T)

※セカンド・オピニオン：医師の診断や治療法について、患者が別の医師の意見を求めること。

※エンパワーメント：1995年の第4回世界女性会議のキーワードであり、女性が力(パワー)をつけることを意味します。



ジェンダー

ワード

仕事と子育ての両立

2000年に施行された男女共同参画基本計画には「男女の職業生活と家庭・地域生活の両立の支援」が重点目標の1つに挙げられています。男女がともに、仕事と育児や家族の介護を両立できる社会にならないと、少子・高齢化が進行する中で、活力のある社会を維持していくことは難しいと考えられます。

基本計画のもと、国も仕事と育児の両立を可能にするため、保育サービスの整備や放課後児童対策の充実、男性の育児休業取得促進などさまざまな方策を講じてきています。しかし、現状は第1子の出産を機に女性の67.4%が退職しています。

また、常勤の母親の80.2%が育児休業を「取得済み、取得予定」であるのに対して、父親は0.7%にとどまっています(『第1回21世紀出生児横断調査』平成13年度-厚生労働省)。男性が育児休業を取らない原因には、休業を取りにくい職場の雰囲気があること、男性自身も育児休業を自分自身のこととして関心を持っていないことなどが考えられます。

今後、男女がともに仕事と子育ての両立を可能にするためには、長時間労働の解消、育児休業がとりやすい職場の雰囲気づくり、子育てを夫婦で取り組むという意識を育てることが必要です。



あなたの生き方をサポートします

女性相談(面接)

日時 ● 毎月第1金曜日 / 午後1時～4時
第2水曜日 / 午後6時～9時
第4金曜日 / 午後1時～4時
(*相談時間はひとり1時間程度)

場所 ● 第1・第4金曜日
せんなん男女共同参画ルーム相談室
● 第2水曜日
樽井公民館3階控室

■ 予約・お問合わせ先 ■
電話予約が必要です
人権推進課 0724-83-0001(代)

悩まないでお電話下さい

女性のための電話相談

女性相談員による女性のための特設電話相談を行います。

人づき合いが苦手で人間関係がうまくいかない、育児や家庭内の問題で悩んでいる、離婚したいけど先が不安で決心できない……、女性が日々の生活の中で直面する問題はさまざまです。ひとりで悩まずに安心してお電話ください。(相談者のプライバシーは厳守します)

電話番号 0724-82-0590

日時 ● 2月16日(月)・17日(火)・18日(水)
時間 ● いずれも午前10時～12時 午後1時～3時

シネマフォーラム2003報告

- 10月4日(土)文化ホールにおいて、岸野令子さん(映画パブリシスト)の解説で映画「ふたりのトスカーナ」の上映を行いました。原作者(ロレンツァ・マツェッティ)自身の体験をもとに、7歳の少女の視点で戦争の日常がいきいきと描かれおり、現実を目のあたりにし、子どもながらにしっかり受け止め向き合っていく姿は、映画をとおして女性問題(女性の生き方)について考える機会となりました。
- 今回は、初めての試みで、より多くの方にご参加いただくために、一時保育に加えて、泉南市絵本とおはなしの会による小学生低学年向けの「おはなし会」も同時に開催しました。「おはなし会」では、ボランティアさん手作りのパネルシアターや手袋人形を使ったお話、巻き紙芝居、ローソクをともしのお話(ストーリーテリング)など、わくわくするような内容で、参加した子どもたちは、ボランティアさんの語りにもどんどん引き寄せられ、気がつくと夢中でお話に聴き入っていました。

